

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：30120

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04442

研究課題名(和文)慢性看護学領域で構築された理論の概念・立言・理論分析および経験的検証、仮説検証

研究課題名(英文)Analysis of Concept, Statement and Theory in Chronic Illness Nursing, and Theory Testing

研究代表者

河口 てる子(KAWAGUCHI, Teruko)

日本赤十字北海道看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50247300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：慢性看護学領域の「看護の教育的関わりモデル」「不確かさ理論」の概念分析、理論分析をWalker and Avantの方法を使用し行った。分析者は、大学に所属する看護研究者16名、病院所属の臨床看護師5名の計21名であり、概念の「生活者としての事実とその意味のわかち合い」「病態・病状のわかち合いと合点化」「治療の看護仕立て」「教育的関わり技法」「患者教育専門家として醸し出す雰囲気」を各概念4～6名で担当した。各概念分析により先行要件、属性、帰結および理論分析により有用性、一般化可能性が示された。経験的検証ではエキスパート看護師11名により代表性、臨床的成果、実践での価値が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性看護学領域の患者教育・ケアのための教育方法や関わり方の概念・モデル・理論では、記述的な研究や要因研究のような調査研究は多いものの、理論に関する研究や実践での適応、経験的検証、仮説検証研究は少ない。欧米で開発された概念・モデル・理論をその論理的適切性や有用性、適応可能性、一般化可能性等を検討しないまま、無批判に受け入れ使用している状況から脱却する可能性がある。また、日本で開発された理論の概念分析・理論分析を検討することにより、適切性や有用性等を明らかにすることができる。

研究成果の概要(英文)：The Walker and Avant method was used to perform conceptual and theoretical analysis of the "Educational involvement model of nursing" and "Reconceptualization of the Uncertainty in illness theory" in the field of chronic nursing. There are a total of 21 analysts, 16 nursing researchers belonging to the university and 5 clinical nurses belonging to the hospital. 4 to 6 people in charge analyzed each concept. Prior requirements, attributes, consequences, and theoretical analysis showed usefulness and generalizability by each conceptual analysis. In the empirical verification, 11 expert nurses such as specialist nurses and certified nurses examined the representativeness, clinical results, and value in practice, and the adaptability of the theory was confirmed.

研究分野：慢性看護学

キーワード：看護の教育的関わり 患者教育 概念分析 理論分析 中範囲理論 生活者 看護仕立て 経験的検証

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

慢性看護学領域の患者教育・ケアのための教育方法や関わり方の概念・モデル・理論では、Prochaska や DiClemente が変容ステージ(stages of change、process of change)の概念を提唱し、各ステージに適切なアプローチを調査研究などによって分析している。また、セルフエフィカシーや Empowerment、行動療法(セルフモニタリングやステップバイステップ法など)、保健信念モデル、病みの軌跡理論や不確かさ理論が米国から紹介されている。記述的な研究や要因研究のような調査研究は多いものの、効果に関する研究や実践での適応、経験的検証、理論・モデルの検証研究は少ない。また、教育・支援する側の研究は、ほとんどなく、具体的にどのように患者に関われば、患者の行動変容がはかれるのか明らかにされていない。

国内の慢性看護学領域の研究知見では、自己管理の必要な慢性疾患患者への集団教育や治療の必要性を強調した指導では、初期は食事療法等の自己管理を実行するものの、ほとんどの患者が元の生活習慣に戻ることが明らかにされている。このような自己管理行動の維持が出来ない大多数の患者には、多くの病院で使用されているパスや看護診断では、効果が期待できない。

また、看護師らへの聞き取り調査では、看護師は患者教育の必要性を感じているものの、具体的にどのように関われば患者の行動変容が期待できるのかがわからないため、患者を避けたり、自己管理のできない患者に「意欲のない患者」とレッテルを貼り、あきらめがちである。

実際、「看護の教育的関わりモデル」を使ったアクション・リサーチでは、看護師らからモデルにより具体的にどのように患者に関わればよいかの示唆が得られ、ケア行為に自信が持て、患者の反応もよいとの結果であった。そこで看護師の良質な療養支援の実現に向けて、慢性看護学領域の概念・モデル・理論の精製のため、概念・立言・理論分析とその検証研究が必要であると考えられた。

2. 研究の目的

研究目的は、第1に慢性看護学領域において患者教育・ケアに関する主たる概念・モデル・理論を抽出し、その理論分析、概念分析を行うことである。実践知モデル・理論である「看護の教育的関わりモデル」「病みの軌跡理論」など中範囲理論の概念分析・立言(statement)分析・理論分析を行う。目的の第2は前述した概念・モデル・理論についての構成概念・立言・理論の経験的検証を行うことである。

なお、研究計画書に記載した「看護の教育的関わりモデル」の仮説検証研究部分は、新型コロナウイルス感染増大により病院の研究受入れ拒否にて実施できなかったため、報告書から削除した。

3. 研究の方法

(1)概念分析

慢性看護学領域の「看護の教育的関わりモデル」「病みの軌跡理論」「不確かさ理論」「保健信念モデル」などの中範囲理論の概念分析、立言(statement)分析、理論分析を概念分析方法は、Walker and Avant (2005)の方法を使用し行う。分析者は、大学に所属する看護研究者16名、病院所属の臨床看護師5名の計21名であり、概念のとっかかり/手がかり言動とその直感的解釈、「生活者としての事実とその意味のわかち合い」「病態・病状のわかち合いと合点化」「治療の看護仕立て」「教育的関わり技法」「患者教育専門家として醸し出す雰囲気」を各概念4~6名で担当して行う。各理論の長所と短所、理論に追加すべき開発や洗練が必要かを明らかにする。

「看護の教育的関わりモデル」では、その構成概念の概念分析、前述の構成概念と概念間の関係性に関して立言分析を行う。

(2)理論分析

理論分析の方法は、理論の意味、論理的適切性、有用性、一般性、簡潔性、検証可能性を明らかにする理論分析を実施する。

「病みの軌跡理論」では、その構成概念「慢性性 Chronicity」「軌跡」「病みの行路」「軌跡の局面」「下位局面」「軌跡の予想」「病みの行路の方向づけ」「編みなおし」「生活史」があり、下位局面には「前軌跡期」「軌跡発現期」「急性期」「安定期」「不安定期」「下降期」「立ち直り期」がある。構成概念の概念分析、構成概念と概念間の関係性に関して立言分析を行い、理論分析を実施する。「不確かさ理論」「保健信念モデル」など他の中範囲理論の概念分析・立言(statement)分析・理論分析を同様に行う。

(3)経験的検証

慢性疾患看護専門看護師および糖尿病看護認定看護師、透析看護認定看護師、慢性呼吸器疾患看護認定看護師、慢性心不全看護認定看護師などのエキスパート看護師による各理論の概念の経験的検証を行い、現象の代表性、臨床的成果、実践での価値を明らかにする。概念の経験的検証は、概念の代表性根拠、患者ニーズ、臨床的成果、重要な臨床判断基準の観点から実践での価値を有する根拠、概念を意味づける属性根拠の裏付け(概念属性検証)により行う。裏付けとなる根拠のために文献検討も同時に行う。

4. 研究成果

(1)「看護の教育的関わりモデル」の構成概念の概念分析

構成概念「とっかかり／手がかり言動とその直感的解釈」「生活者としての事実とその意味のわかち合い」「病態・病状のわかち合いと合点化」「治療の看護仕立て」「教育的関わり技法」「患者教育専門家として醸し出す雰囲気」の概念分析を行った。

a. 「生活者」の概念

健康との絡みで、特に生き方と価値観を重視し、患者が日常生活の中で「こだわっていること」「大切にしていること」「絶対変えたくないこと」、すなわち生活信条を持つ人を生活者と捉え、生活者を“その人の生きてきた個の歴史の中で培われた生活習慣や生活信条を持ちながら生きていく人”と定義された。また、“生活は人間の存在そのものであり、各個人の主体的営みである。生活には、生命、生存 生活習慣、社会的活動、生計、暮らしむき 価値観、信条、生き方の側面がある”と定義されている。

概念分析の文献検索は、医学中央雑誌 Web のデータベースを活用した。検索条件は 2006 年から 2020 年 12 月、検索条件を「分類：看護、原著論文、抄録・本文あり」に設定した。キーワードを「生活者」とし、黒江ら 1) の分類と同様に検索した結果、「生活者+教育」82 件、「生活者+地域」59 件、「生活者+精神」37 件、「生活者+リハビリテーション」27 件、「生活者+在宅」16 件、「生活者+健康教育」11 件、「生活者+災害」6 件、「生活者+がん」3 件、「生活者+外来」3 件、計 134 件が抽出された(重複あり)。全文から、量的調査研究の文献を除外し、「生活者」に関する文脈が記述されている文献と、本研究の目的にそっている文献を選択して、最終的に 51 件を概念分析の対象論文とした。殆どの論文には「生活者」を定義づけているものはなかった。

51 文献の概念分析を行った結果、「生活者」の属性、先行要件、帰結が明らかになった。先行要件は、[健康が脅かされる状況] 病気、加齢、[生活の営みが脅かされる状況] ・災害、生活環境の変化であった。属性は、[基本的欲求を満たすために主体的に活動している][その人が培ってきた生活習慣や生活信条をもって生きている][他者とのつながりを作ろうとしている][その人にとっての役割を担いながら生きている][自分らしい生き方で生きている]であった。帰結は、[生活の再構築][成長・成熟][自立][治療と社会生活との両立]であった。

上記の結果から、「生活者」とは、[健康が脅かされる状況]や[生活の営みが脅かされる状況]に遭遇したとき、他者の援助を求めて、あるいは自分の力で生活を取り戻そうとする。生活者とは、[基本的欲求を満たすために主体的に活動している][その人が培ってきた生活習慣や生活信条をもって生きている][他者とのつながりを作ろうとしている][その人にとっての役割を担いながら生きている][自分らしい生き方で生きている]という人である。そのように生きることが、[生活の再構築][成長・成熟][自立][治療と社会生活との両立]に向かっていたことが示された。

b. 「病態・病状のわかち合いと合点化」

看護領域だけにとらわれず、多様な学問領域の文献から本概念の使用を明らかにした。文献の検索は、「医学中央雑誌」および京都大学論文一括検索システム「Discovery」を用いて、「わかち合い」「合点」をキーワードにし、年数制限を行わずに検索、収集した。「わかち合い」については、112 文献、「合点」については 2 文献を分析対象とした。

一般的な使用法としては、合点は、「承知、承諾、納得。こういうものであると理解できる、納得がいく。」などの意味であるが、「同意すること、承知してうなづくこと」という意味も持つ。類似語には、「腑に落ちる」を抽出した。合点は、個々が合点するので、患者の病状理解と実際の病状を重ねる病態(見えないもの)を見えるようにする知的・感情的に理解することが求められるものであった。「わかち合い」「分かち合う」について「分け合う。同じものごとを共有する。」という意味を持つ。

「合点」は、属性に関して、偶然によって引き起こされる何らかの作用によって、飛躍のような発見であり、この瞬間に「なるほど」「これだ」と合点する。結果の分からない作用を主体的に引き起こすことを含めて偶然といっているのであって、自らに沸き起こる作用という特性があった。

「わかち合い」の対象としては、感情や体験、苦悩などで、喜びもあるが、辛く悲しいことをわかち合うことが多いという特徴があった。また、豊かさや不便さ、問題や意見や知識・目標・価値観・嗜好など多くのものをわかち合うことができる。わかち合うためには、介入として、グループ討議を設定すること等による直接的な交流が必要であり、自己表出された心の内面に耳を傾け共感し、支え合うプロセスがあった。また、互いに異なることを前提とした上で、相互の信頼関係が重要となっていた。「わかち合い」の帰結は、ピアサポート、癒し、重要他者との関係性の改善、肯定し共感する、孤立感・不安感の軽減、安寧感の増加、エンパワー等多くの心理状態の改善となる。支え合い、望ましい決定に向け相互に行動し合意に至るといった両者の関係性や望ましい結果を導くことも促進していた。先行要件としては、両者の認識に差がある状況で、わかち合う対象は状況への精通がベースにある、さらに、相互支援を求めるニーズが存在し、対話、交流する場の提供や存在があることが要件となる。

本概念の特性は、相互の信頼関係を基盤に、感情や体験、知識・認識等を共有するプロセスの中で、相互作用があり、「これだ」という瞬間が舞い降りる。結果として、患者自身の、自己受容・肯定的変化・孤立感からの解放・他者から尊重されることの実感・病気・死の受容・生き方や価値観の変容を導き、相互理解が進むプロセスである。

c. 「治療の看護仕立て」

概念の用法は、「仕立て」については、料理における仕立て、服作りにおける仕立てから着想を得て、患者の思いを看護師が看護の視点で仕立てるという意味を込めて、「仕立て」という言葉を採用した。調理、縫製における「仕立て」の実践場面において作り手の意図を反映させる、相手の希望や状況に合わせるエピソードが語られたが、「仕立て」の定義について、辞書には相手に合わせる意図は明示されておらず、患者の思いや生活に合わせるという「看護」に独自の意味を明文化する必要性が明らかになった。

関連用語として「テイルメイド医療」の用法を調べたところ、遺伝子情報にあわせた治療であり、生活に合わせるという意味を含めて使われてなかった。一方、「治療調整」「薬物調整」は、ライフスタイルや患者の希望にあわせて行われるものとして説明されていた。「治療の看護仕立て」に最も近い関連用語として「生活調整」をキーワードした看護文献を検討した。「生活調整」105件について、誰がどのように何を調整しているのかを分析したところ、生活調整は患者自身の行為として用いられており、属性として「生きがい・信念に基づく」「体調にあわせる」「疾患の悪化・進展を予防する」「食事、活動、服薬などの仕方を変える」「周囲の協力」が見出された。

「治療の看護仕立て」はオリジナルの概念であるため、過去の議事録より属性を抽出した結果、5つのプロセスである「対象者の意思・認知・生活を捉える」「病気の現状とそのリスクについての見通し」「実行可能な治療・療養法の見通し」「意思・病状・認知・生活に合わせた治療のアレンジ」「フォロー」が属性に相当すると考えられた。

d. 「教育的関わり技法」

概念の明確化では、「教育的関わり技法」という言葉をキーワードとして、医学中央雑誌にて検索したが、本研究会以外で用いられていることが確認できなかった。そのため「教育技法」という言葉の概念の明確化を図ることが妥当と判断した。また、「技法」という言葉が妥当かを確認するために、代用語としての「技術」という言葉について類似性と相違性の確認を行った。

技法に相当する英語として、skill、technique、method、craftsmanship が挙げられたため、それぞれの単語の意味および類義語を辞書で確認した。また、Pub med で patient education と nursing をキーワードとし、前述の各用語をタイトルに含む文献を検索して文献内での使用方法を確認した。その結果、skill、technique は個人の能力や技術、method は目的や意図を達成するための方法や手順、craftsmanship は特定の専門性の高いスキルのレベルや技量としての意味で用いられていることが多かった。いずれの用語も education method のように何らかの接頭句がついた状態でその意味や定義が述べられており、用語単独で説明されている文献は見当たらなかった。

データ収集に適した範囲では、「教育技法」については、医療の領域だけではなく一般でも使われるため、データ収集に適した範囲の選定として和文辞書と国立国会図書館データベースの日本語の「図書」に絞り込み検索した。検索期間は2010年から2020年である。その結果3件が抽出された。その3件は「ラット解剖実習ガイド：看護実践能力を高めるための解剖生理学基礎知識必勝教育技法、長嶺千里、大倉信彦 著 文芸社 2010」「助産実践能力習熟段階 クリニカルラダー にもとづいた助産実践能力育成のための教育プログラム、日本助産実践能力推進協議会 編集 医学書院 2015」「建築教育技法に関する実践的事例報告、角本邦久 執筆・編集・監修 高齢・障害・求職者雇用支援機構関東職業能力開発大学校附属千葉職業能力開発短期大学校 2014」であり、共通した目的に対する教育技法は述べられていなかった。

医療領域においては、医学中央雑誌 Web にて検索分野は「看護」、キーワード「教育技法」で「原著論文」「本文あり」に限り検索を行った。その結果16文献が抽出された。検索期間は2008年から2017年である。16文献は看護教育における授業の方法としてのロールプレイ、シミュレーション教育、グループワークの展開方法、模擬患者を用いた授業など看護基礎教育の授業方法に焦点をあてた研究であった。そこで、再度、医学中央雑誌 Web にて2000年から2020年7月において検索分野は「看護」、「原著論文」「本文あり」を指定し以下のキーワードで検索を行った。「看護教育」+「教育技法」と「患者教育」で42件であり、その中から「看護基礎教育」を除くとして15件が抽出された。また、「看護」+「指導」と「患者教育」41件であり、その中から「スタッフ、看護師、看護基礎教育」を除くとして15件が抽出された。さらに、「指導・指導方法」+「患者教育」41件からその中から「スタッフ、看護師、看護基礎教育」として除く26件が抽出された。最終的には研究者間で検討し、本研究の概念分析の目的にそった16文献を分析対象とした。

また、「技法」や「技術」という言葉も、一般でも使われるため、データ収集に適した範囲の選定として和文辞書と国立国会図書館データベースの「図書」に絞り込み、両方の言葉について検索した。その結果、和文辞書10件に記載があった。国立国会図書館データベースでは、「技法」では2605件、「技術」では49574件が検索された。「技法」と「技術」の言葉を検討したところ、両用語は非常に類似した概念であり、明確な区別は難しいことが明らかになった。また、我々のモデルは、熟練看護師が対象者と信頼関係を築く、対象者とともに療養生活上の困難ごとを理解する、困難ごとへの取り組みを支援する際の、具体的な方法を示していることから、「技法」のほうがより考えている内容に近く、「技法」を用いることが妥当であるとのコンセンサスが得られた。

「教育的関わり技法」は文献がないこと、「技法」という言葉単独で検討して「看護師の教育

的関わりモデル」の中の「教育的関わり技法」について説明することは困難であることから、分析する概念は「教育技法」として概念の明確化を行うことにした。属性は、医学中央雑誌にて抽出された16文献をもとに、「教育技法」についての属性の明確化を行った。しかし、本モデルの中の「教育的関わり技法」の新しい意味や定義を開発につながるような属性は見出すことができなかった

e. 「患者教育専門家として醸し出す雰囲気(Professional Learning Climate)」

分析対象は、Learning Climate とし、医学中央雑誌、PubMed、Eric から LC を含む文献を検索した。医学中央雑誌 7 件、PubMed では 20 件、Eric では 43 件であった。

属性は、「専門家としての看護職者が醸し出す態度や雰囲気」「体現された行為を通じた潜在的な考え方の伝播」「経験値としての総合的な教育実践力」「看護職者の教育実践から抽出された概念」の4つに大別された。また、PLC は人間観と専門的な知識と技術に裏打ちされ、患者の病状やおかれている状況と場面の解釈の結果として生じた行為が先行要件であり、PLC があることによって行動変容の促進や自己の内省、学習の動機づけなどの対象者の変化につながるものとされていた。

LC と PLC との関係性に関しては、PLC は LC の属性である「教育者の能力や教育実践」の範疇にあり、看護職者の患者への教育的関わりに焦点をあてた実践レベルの概念であった。一方で、PLC は行為そのものではなく、特定の先行要件に基づいて表出された雰囲気やムードであることから LC の「学習の物理的環境」としての要素も持ち合わせていることが確認された。以上、PLC は LC の派生概念でありながらも、対象者の変化を主要なアウトカムとする教育者としての看護職者の雰囲気やムードに着目する概念であることを確認した。

(2) 病気の不確かさ理論(Reconceptualization of the uncertainty in illness theory)の理論分析

理論の起源は、情報工学モデルと心理学分野の人格研究が基となっており、最初の理論に内在するストレス/評価/対処(コーピング)/適応の枠組みは心理学分野の Lazarus と Folkman の研究による。Lazarus と Folkman の研究を基にストレスを不確かさに置き換えて構築された。さらに、慢性疾患患者の増加に伴い、オリジナル理論は急性期や積極的治療を受ける段階にある患者には当てはまるが、慢性期にある患者には当てはまらない等の批判を受け、無秩序と新しい安定への再編成を説明する複雑系を扱う、プリゴジンら(Prigogine&Stengers, 1984)のカオス理論を基に Mishel は 1990 年に再概念化を行っている。

不確かさには4つの種類があり、病状の曖昧さ、治療やケアシステムの複雑さ、病名や病気の重症度に関する情報不足や不一致、病気の進行や予後の予測不可能性である。

a. 論理的適切性

帰納的に作成されたが、その後の再概念化によって演繹的に作成されたことから理論的適切性は十分にある。

b. 有用性

医中誌 Web 版で「不確かさ」を原著に絞って検索すると 314 文献、PubMed で「uncertainty illness」5 件、Human で検索すると 857 文献が抽出された。この理論はがん、心臓病、MS 等の多くの急性、慢性疾患患者に使用されており、多くの疾患に適応すると思われ、多くの研究に使用されている。さらに不確かさ尺度(MUIS-A)は15か国に翻訳され、疾患特異版、家族版、小児版が作成されていることから有用性があると判断される。

c. 一般化可能性、簡潔性

モデルとして単純なものではないが、概念の定義や関係は容易に理解できるものとして表されており、簡潔明瞭である。また、理論は一般化されており、自分自身の病気の経験や病気に関係する不確かさを経験した人々の配偶者や両親にも用いることができる。

d. 検証可能性

1988 年に最初に発表された理論で Mishel らはモデルの主要構造間の関係を実証検証している。また、本理論は理論が情報を与え、さらに多くの研究によって理論が形作られるような双方向のプロセスをたどっていることから検証できると判断された。

(3) 「看護の教育的関わりモデル」の経験的検証

慢性疾患看護専門看護師 4 名、糖尿病看護認定看護師 3 名、透析看護認定看護師 2 名、慢性呼吸器疾患看護認定看護師 1 名、慢性心不全看護認定看護師 1 名のエキスパート看護師による各理論の経験的検証を行った。対象の看護師は、1 年間に渡り、患者教育の実践の中で現象としての各概念の存在とアプローチの妥当性を検討し、概念の経験的検証として、概念の代表性根拠、患者ニーズ、臨床的成果、重要な臨床判断基準の観点から実践での価値を有する根拠、概念を意味づける属性根拠の裏付け(概念属性検証)を行った。11 名のエキスパート看護師は、各概念現象の代表性、臨床的成果、実践での価値が非常に高いと回答した。

また、日本糖尿病教育・看護学会(2018・2019・2020年)および日本慢性看護学会(2018年)の交流集会においても、参加の臨床看護師からこの理論と構成概念に関して、現象の代表性と臨床的意義について高く評価され、それぞれの実践の根拠となると評価された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林貴子, 小長谷百絵, 横山悦子, 小平京子, 伊藤ひろみ, 河口てる子	4. 巻 5
2. 論文標題 「看護の教育的関わりモデル」における「とっかかり手がかり言動とその直感的解釈」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 横浜創英大学研究論集	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小長谷百絵, 横山悦子, 小林貴子, 小平京子, 伊藤ひろみ, 河口てる子, 大池美也子, 林優子, 岡美智代, 伊波早苗, 太田美帆, 安酸史子, 近藤ふさえ, 東めぐみ, 井上智恵, 大澤栄実, 小田和美, 道面千恵子
2. 発表標題 看護の教育的関わりモデルにおける「とっかかり／手がかり言動とその直感的解釈の概念化」
3. 学会等名 第13回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上智恵, 河口てる子, 東めぐみ, 大澤栄実, 太田美帆, 長谷川直人, 安酸史子, 岡美智代, 道面千恵子, 小林貴子, 近藤ふさえ, 伊波早苗, 横山悦子, 滝口成美, 小田和美, 小平京子, 恩幣宏美, 伊藤ひろみ, 下田ゆかり
2. 発表標題 患者教育における熟練看護師のプロの技～患者教育専門家として醸し出す雰囲気～
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 近藤ふさえ
2. 発表標題 患者の行動変容につながる「看護の教育的関わりモデル」
3. 学会等名 中日友好病院35周年記念フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上智恵, 河口てる子, 安酸史子, 岡美智代, 小林貴子, 近藤ふさえ, 小平京子, 小田和美, 東めぐみ, 伊波早苗, 横山悦子, 太田美帆, 滝口成美, 大澤栄, 道面千恵子, 伊藤ひろみ, 下田ゆかり
2. 発表標題 困った患者と思っていないか? ~見せます! 熟練看護師のプロの技~
3. 学会等名 第23回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河口てる子, 安酸史子, 大池美也子, 林優子, 岡美智代, 小長谷百絵, 小林貴子, 近藤ふさえ, 小田和美, 東めぐみ, 伊波早苗, 井上智恵, 横山悦子, 太田美帆, 滝口成美, 大澤栄実, 道面千恵子, 伊藤ひろみ
2. 発表標題 「看護の教育的関わりモデル」開発から23年
3. 学会等名 第12回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 河口 てる子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 熟練看護師のプロの技見せます! 慢性看護の患者教育 患者の行動変容につながる「看護の教育的関わりモデル」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

患者教育研究会(Patient Education Research Group)ホームページ
<https://plaza.umin.ac.jp/tkmodel/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	東 めぐみ (HIGASHI Megumi)		
研究協力者	伊波 早苗 (IHA Sanae)		
研究協力者	井上 智恵 (INOUE Chie)		
研究協力者	小田 和美 (ODA Kazumi)		
研究協力者	恩幣 宏美 (ONBE Hiromi)		
研究協力者	道面 千恵子 (DOUMEN Chieko)		
研究協力者	滝口 成美 (TAKIGUCHI Narumi)		
研究協力者	伊藤 ひろみ (ITO Hiromi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大澤 栄実 (OOSAWA Emi)		
連携研究者	安酸 史子 (YASUKATA Fumiko) (10254559)	防衛医科大学校・医学教育部・教授 (82406)	
連携研究者	林 優子 (HAYASHI Yuko) (50284120)	大阪医科大学・看護学部・教授 (34401)	
連携研究者	大池 美也子 (OOIKE Miyako) (80284579)	九州大学・医学(系)研究科(研究院)・教授 (17102)	
連携研究者	岡 美智代 (OKA Michiyo) (10312729)	群馬大学・医学部・教授 (12301)	
連携研究者	小長谷 百絵 (KONAGAYA Momoe) (10269293)	上智大学・総合人間科学部・教授 (32621)	
連携研究者	小林 貴子 (KOBAYASHI Takako) (50279618)	横浜創英大学・看護学部・教授 (32727)	
連携研究者	小平 京子 (KODAIRA Kyouko) (40205406)	関西看護医療大学・看護学部・教授 (34531)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	近藤 ふさえ (KONDO Fusae) (70286425)	順天堂大学・保健看護学部・教授 (32620)	
連携研究者	下村 裕子 (SHIMOMURA Hiroko) (20216138)	日本赤十字看護大学・看護学部・講師 (32693)	
連携研究者	太田 美帆 (OTA Miho) (80385468)	東京家政大学・看護学部・講師 (32647)	
連携研究者	長谷川 直人 (HASEGAWA Naoto) (00436198)	自治医科大学・看護学部・講師 (32202)	
連携研究者	横山 悦子 (YOKOYAMA Etsuko) (40329181)	防衛医科大学校・医学教育部・准教授 (82406)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関